

ふるさと奥尻通信

平成24年6月15日
奥尻町教育委員会発行
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭語

今年も賽の河原祭りの日がやってきます。これは元来、海難受難者や水子供養のために始まった、地元の供養祭であり、観光色が強くなった今日でも、奉納相撲が継続して行われています。

特集 稲穂灯台の歴史 -火薬庫のレンガ基礎発見！-

6月の奥尻島は、濃霧に覆われる日があります。濃霧の日は飛行機が欠航し、防災無線にて「奥尻発〇時〇分の航空機は、奥尻空港悪天候のため欠航となりました」と放送が入り、皆ガックリ…。こういう天候の時に稲穂岬や青苗岬の灯台が活躍します。現在ではGPS搭載の船ばかりですから、座礁・転覆という海難事故はめったに起きませんが、それらが開発される以前(江戸期～昭和中期)は、濃霧による事故が多発していたのです。稲穂岬に賽の河原として供養の場が出来たことから、海難事故の多さが想像されます。

北海道庁によって稲穂岬の灯台が整備されたのは明治22年のことで、同24年12月に初点灯しました。当初は二重芯ランプだったのを三重芯ランプに改良し、大正4年に石油ガス化式灯器に変更、昭和27年に電化されて1kw電球に取り替えられました。点灯以来、長らく灯台守が常駐し、運用・保守管理がなされてきましたが、昭和57年より機械の自動化がなされ、翌58年から無人化しました。通常、灯台の形状は円柱型ですが、稲穂の灯台は四角いために、全国的にも珍しいようです。

灯台の四角い建物には、窓が1つ付いていますが、これは北方照射塔が併設されているためです。夜間は北をまっすぐ指した光線が伸びており、約1km先の反射板を照らしています。この付近には暗礁があり、数々の海難事故が発生した難所でした。



現在の稲穂灯台(3代目)

☆稲穂灯台の歩み☆

| | | |
|-------|------|-----------|
| 明治24年 | 1891 | 灯台竣工 |
| 明治35年 | 1902 | 光源、三重芯ランプ |
| 明治36年 | 1903 | 霧信号業務開始 |
| 大正4年 | 1915 | 光源、石油ガス化式 |
| 昭和4年 | 1929 | 霧笛、サイレン式 |
| 昭和27年 | 1952 | 建物改築、光源変更 |
| 昭和36年 | 1961 | 青苗へ事務所移転 |
| 昭和46年 | 1971 | 北方照射塔設置 |
| 昭和57年 | 1982 | 建物改築、自動化 |



初代灯台 昭和12年



2代目灯台 昭和43年

稲穂のマッカ岩の下には「稲穂寄燈台用地」と刻まれた石柱が建っています。当時はここまでが灯台用地の境界線だったでしょう。さらに、灯台とマッカ岩の間には、レンガ建物の基礎が残っているのを見つけました。島内には、奥尻鉱山関係を除いて、レンガ建物がほとんど無いため、非常に珍しい発見となりました。稲穂地区の水野哲雄さんに伺ったところ、灯台に霧笛ができる前は、火薬を爆発させて「ドンッ」と大きな音を出して航行船に位置を知らせており、その火薬を保管するための火薬庫であったことが判りました。火薬爆発による霧信号業務は、明治36年より開始され、当初20分毎に1回、後に10分毎に1回へ変更し、昭和4年に圧搾空気によるサイレン式に変わるまで続けられました。火薬庫の上屋は、津波以前から完全に壊れており、レンガ基礎も半分ほどしか残っていません。それでも後の津波被害に遭っても残るほど、基礎が頑丈な造りだったこととなります。他に通風口らしきものが2個あり、鉄扉が付いていたと思われる蝶番が残っていました。これらも奥尻の近代史を物語る証人ですので、大切に記録・保存していきたい遺構です。



火薬庫のレンガ基礎



通風口?



稲穂寄燈台用地の標石

レンガの積み方

